

はじめに

清真学園野球部も創部40年を超え、私の自慢の野球部の大切な教え子達もこれまで250名を超えました。思い起こしてみますと、野球の技術だけでなく、学業との両立・人間関係などに悩みながら必死に頑張る姿、時には笑い、時には泣きなきながら学生生活に取り組んでいた頃の真剣な顔つきを今でも鮮明に覚えております。

この26年、一貫して『高校野球をやる上での目標は、甲子園出場。目的は、野球を通して立派な社会人になること』を掲げて活動してまいりました。練習日誌である「熱球ノート」は、現在77冊目に突入しております。一人ひとりの熱い思いが込められたノートは、時に現役選手にとって大きな道しるべとなり、卒業生にとっては青春の思い出の1ページとして大切に保管されています。私にとっても大切な指導書となっております。

現在、多くのOB・OGがこの野球部から巣立ち社会に出て活躍されております。今回、3回目となる『清真学園野球部を語る』という原稿を依頼したところ早速たくさんの方が届きました。

現役選手への激励はもちろんこれから高校野球をはじめの生徒や応援して下さる多くの方々にぜひお読みいただきたいと思い掲載いたします。本校野球部を知る機会にして頂ければ幸いです。

2020年1月10日

清真学園野球部監督

辻岡 敦



中川泰輝 (29 期生) 2009 年卒業

東京農工大学工学部～航空大学校～ANA ウイングス (運航乗務員)

高校野球といえば、誰もが知っている夢の舞台「甲子園」。野球をする人は誰もが憧れる舞台です。私もそこを目標にしていた一人。今でも野球をしている姿を見ると自分もしたくなります。その舞台に立てる、立てないに関係なく、仲間と共に目標に向かい努力することは最高の経験に繋がります。

清真学園は文武両道を掲げている進学校です。私は高校生活を大学進学のために、勉強するだけの生活はもったいないと思います。部活・学業の両立をしている人が多くいます。野球部の仲間だけでなく、他の運動部や文化部で多く同級生や先輩、後輩が活躍し良い刺激を得ました。今の自分がいるのはそこ経験があるからです。

野球部には野球だけでなく多くのことを指導して下さる監督やコーチがいます。野球部の活動を応援してくれる在校生、卒業生、地域の方々があります。その環境で野球ができることは幸せです。部活動の時間は、他の高校に比べると限られています。しかし、今やるべきことを考え、時間の使い方を考えることに繋がります。苦しい時期も一緒に乗り越える仲間がいます。自分は何をすべきか、仲間と一緒に何をすべきか、仲間の為に何ができるかを考え行動する能力を身につけます。逃げ出したくなるような厳しい環境に置かれたときに、その困難に立ち向かうために自分がどうすべきか考えられるようになるのがこの野球部です。楽しい、辛い、悔しいなど多くの事を経験し学びました。今しかできない経験を、どんなに辛くても逃げださずに我慢強く仲間と乗り越えた事は自分の財産です。

多くの先輩、後輩が有名大学に進学し、社会で活躍されています。野球部での経験が今の自分に繋がっています。高校時代、勉強より野球だった私ですが、高校生活での経験が生き、自分の夢を追いかけることができています。それは、夢(目的)を叶えるためにやらないといけないこと(目標)への頑張り方、限られた時間の使い方、困難を乗り越える為の基礎を身に着けることができたからです。

清真学園に入学しようと考えている方、高校野球をしようと思っている方、清真学園野球部で野球をしてみてください。楽しいことだけではなく、最高の仲間と困難に立ち向かい夢に挑戦してみてください。最後になりますが、最後まで自分を我慢強く、時には厳しく時には優しく傍で支えてくれた両親への感謝の気持ちは忘れることはないと思います。

生井澤英知（38期） 2018年卒業 関西学院大学 在学中

清真学園の生徒として過ごした高校3年間の締めくくりである高校卒業式、その日に私はとにかく濃い3年間を過ごしたなと実感しました。それは間違いなく野球部の一員として高校生活を過ごしたからに他ありません。

日々の練習を通じて、1人の選手としてだけでなく1人の人間として多くのことを野球場で学びました。気遣い、挨拶、礼儀、チームワーク、はたまた頭の使い方。どれも学校の授業だけでは学ぶことのできない大切なことです。

また高校球児にとって夏の大会は勝ち負けに関わらず、思い出深いものです。私自身の初めての夏の勝利は3年生の夏、清真学園野球部としても6年ぶりの勝利となりました。2年生の夏に人生で一番の悔しい思いをしたからこそ、「史上最弱のチームだ」と言われたチームで勝ったからこそ、その勝利の喜びは格別のものになりました。

私は熱量をかけて、仲間とともに同じ目標に向かって切磋琢磨しあえる環境で高校時代を過ごすことができたことに誇りを持っています。後輩の皆さんや後輩になるかもしれない皆さんが清真学園のグラウンドで選手として、人間として成長していくことを願っています。

岡田 駿（38期） 2018年卒業

千葉大学 在学中

「清真学園野球部で本当に良かった。」私は胸を張ってそう言えます。清真学園野球部での3年間は自分にとってかけがえのないものとなりました。素晴らしい先生、大切な仲間。とても恵まれた日々であったと思います。練習は朝早くから夜遅くまでありほとんど野球をやっていた記憶しかありません。先生には怒られてばかりで全てが楽しい思い出というわけではありませんでしたが、そんな時は仲間が支えてくれました。野球部を誇りに思います。

3年生の夏の大会1回戦は今でもはっきりと覚えています。自分たちの代は大会でなかなか結果が出ず、とにかく夏の大会では勝ちたいという思いがチームに浸透していました。そうして迎えた1回戦では一度は逆転を許したものの終盤に逆転し勝利することができました。みんなが泣いていました。一つの事に向かって全員が熱くなれるのは清真学園野球部の伝統でもあり、とても魅力あふれる部分です。

ここで過ごした3年間があったからこそ今の自分があります。野球部に入らなくて後悔することはあるかもしれませんが、入って後悔することはないと断言できます。清真学園に入学して、そして野球部に入って最高の高校3年間を過ごしてみませんか。それが皆さんにとってかけがえのないものとなるのは間違いないでしょう。読んでいただきありがとうございました。

鈴木 奈々 (37期) 2017年卒業

明治大学 在学中

今、私は大学で部活をしていて、今年は「日本一」を目指しています。高校生の時に運動をしていなかった私が、大学という、自由でいろいろな選択肢がある環境で、どうしてわざわざ部活に入って活動しようと思ったのか。それは、高校時代に清真学園野球部で学ぶことができたさまざまなことを生かせるのはそこしかないと感じたからです。

道具を大切に作る、挨拶をする、落ちているゴミを拾う、提出物の締め切りを守る。このような、人として当たり前のこととはどういうものなのかを野球部での生活を通して行動で教えていただきました。また、日々の行動は良いことも悪いことも必ずどこかで誰かが見ていること、そして何より、日々の「人としての当たり前」の少しずつの積み重ねが勝利という結果につながっているということも知ることができました。

これは誰でも知っていることのように思えますが、実際に体感できる機会はあまりないんじゃないかな、と私は思います。マネージャーとして野球部に所属していた3年間で本当にたくさんのことを学びました。本気で向き合って、注意してくださる環境は、何気なく生活を送っているだけでは絶対に味わうことのできないものだと思います。野球部での経験は、間違いなく社会に出てからも自分の軸になると確信しています。

こんな貴重な経験ができる清真学園野球部は、本当に素晴らしくて誇りに思える場所です。

笹本英輔 (37期) 2017卒業 明治大学在学中

私は清真学園野球部での生活を通して、人として大きく成長したと自信を持って言えます。振り返ってみると、高校3年間での積み重ねが現在の自分の基礎になっていると思えるからです。

私は1年生から多くの経験を積みましたが、なかなか結果を残すことができず、1勝することの大変さや、期待に応えること難しさを知りました。結局最後まで結果を残すことができませんでしたが、それでも夏の大会などに応援に来てくださる多くの方々、また支えてくれた周りの皆へのありがたさをより強く感じました。こんな貴重な経験は高校野球だからこそできたものです。

そして高校野球を通して何よりも培うことができたことは忍耐力と継続力です。日々の辛い練習をやりぬいたことで自然と身につけ、そのおかげで1年の浪人生活も乗り切り、志望大学に入学することができました。

私としては満足のいく結果は得られないまま終わってしまった高校野球でしたが、そこから学んだこともありました。それは大きな財産になっています。高校野球に捧げた学生時代はかけがえのないものでした。

東田 秀馬 (35期)

2015年卒業

青山学院大学 ～ メガバンク総合職

「人生で初めて本気を感じられる場所」

人生で何かに本気で取り組んだことがありますか？

私は硬式野球生活を終えたとき、初めて「本気で何かをする」という言葉の真の意味を知りました。睡眠時間を削って死ぬ気になって練習して、時には骨折したまま試合に出場するなど、正直、時代に反していると言われたら否定はできません。しかし、そこまでしてやっと見えてくるものもあるのです。ここでの成長は、その後の人生で必ず生きてくると保証します。ここでしか出来ない壮絶かつ爽快な3年間を是非経験してみてください。本気で自分と向き合ってくれる監督がいて、一つの目標に向かって一緒に戦ってくれる心強い仲間がいて、その中で培った経験は自分自身の一生の財産になります。

恐らく、自分の好きなことを心の底から本気でできるのは高校時代しかありません。一度グラウンドに足を運び、本気の仲間たちと会って、本気で泥まみれになってみませんか？

先輩方を見ても、野球部からレベルの高い大学に受かった方はたくさんいます。もちろん時間が減る分大変にはなりますが、精一杯やれば結果はついてくるはずですよ。そして、そのような壮絶な経験をしている人は少ないですので、まだだいたい先の話だとは思いますが就職活動は相当強いんです。何事も全力で取り組めば、良い結果が待っているはずですので頑張ってください。

和田颯太 (37期)

2017年卒業

同志社大学在学中

人生において一番充実した日々を送ったのは、高校生活3年間であると断固として言える。また、これからもあの充実した日々を超えることはないと思う。

清真学園野球部に入らないと得ることができなかったものはかけがえのないチームメイトである。嬉しい時はその嬉しさを共有し、悔しい時はその悔しさを分かち合うことができた。あなたは自分の活躍よりもチームメイトの活躍を嬉しく思ったことがあるだろうか？思うように活躍できていなかった人が努力を重ねて、たった1本のヒットを打ったときの嬉しさや感動は言葉では表すことができない。それは、その選手がどれだけの努力をして、苦勞してきたかを部員みんなが知っているからである。人数が少ないからこそ誰ひとりとしておいてきぼりにはしないチームだからである。僕は決して人数の多いチームが強いとは思わない。個と個の結束が強いチームの方が強いと思う。最高なチームメイトと3年間を共にできたことは一番の財産である。

これを読んで、清真学園野球部に入り、最高なチームメイトを得ることを望んでくれたら幸いである。

小日向凌（36期） 2016年卒業

東北大学在学中

私にとって清真学園の野球部で過ごした3年間ほど強烈かつ最高な時間は他にないと思います。一生忘れたくても忘れることのできないような思い出を野球部で作ってみませんか？

私は3年間の内、1年間は主将を務めながら様々なものを得ました。野球の技術はもちろんですが、あいさつや広い視野でもって細かなことに気づくこと、お互いがカバーし合えるよう協力することなど社会にでて必要になるものも学びました。そして何より一生付き合える仲間ができました。

この仲間たちは共に辛酸を嘗め合ったいわば戦友です。同じ目標に向かって切磋琢磨し、衝突することもあればたまにバカをやって先生に怒られて、こっそり愚痴をこぼし合ったりしました。3年間家族よりも一緒にいる時間が長くなるのですから良いところも悪いところも全部わかります。練習がない日でもなんとなく部室に集まってしまい、くだらない話をしては笑いあいました。そんな仲間たちだからこそ試合で活躍すれば自分のことのように喜べるし、失敗して怒られたら励まし合い共に成長しようと努力しました。そんな仲間たちは今でも集まり当時の話で盛り上がったり、近況のことを相談したりと切っても切れぬ間柄です。

高校で野球をやろうか悩んでいてなんだか大変そうだから嫌だなとか、辛いことをしたくないからやめておこうかなと思っている人は騙されたと思って始めてみませんか？実際大変だし辛いこともいっぱいあるけど、仲間と感動を分かち合い、それを周りの人にも届けることができるというのは本当に素晴らしいことです。高校野球は肉体的にも精神的にも自分自身を周りの人より一回り二回り成長させてくれます。この経験は将来絶対に自分のためになると断言できます。それほどまでに貴重な時間です。絶対に後悔させません。一人でも多くの後輩が野球部の門をたたくことを願っています。

宮内孝太（37期） 2017年卒業

中央大学在学中

清真学園野球部は野球の技術はもちろんのこと、人間的にも大きく成長できる場所です。私自身高校野球というステージではチームとしても個人としても思うような結果は残すことはできませんでしたが、礼儀、挨拶、一体感、熱さ、そして自ら考え行動するなどこれからの人生で必要な土台をつくることができたと思います。

高校野球は実質二年半で終わってしまいますが、高校野球が終わっても人生は続きます。むしろその後の人生のほうが長いです。そして、その後の人生にも良いこともあれば悪いこともあると思います。高校野球をやっている間でもケガがあったり、上手くいかなかったりすることなどがたくさんあります。自分自身その連続でした。しかし、それはスポーツという勝負の世界で戦っていれば絶対にあることです。でも、そういう時にそれを乗り越えようと自分で考えて努力したこと、どう努力するのか工夫した経験は今後絶対に生きてくると思います。

また、野球はチームスポーツですが、局面を切り取ると個人の闘いでもあります。バットを振るのは自分、ゴロをさばくのも自分、盗塁のスタートをきるのも自分です。練習をするのも自分です。最後は全部自分で行動して判断していかなければいけません。まだまだ、社会のことはわかりませんが、これは社会に出ても同じことなのではないでしょうか。つまり、野球に向き合うということは、自分が人生を歩んでいく中で絶対に必要な経験になるのだと、今振り返ると思います。

必死に野球に打ち込んだこと、苦しい中で頑張ったからこそ得られるものが必ずあります。目標に向かって努力すれば、だれでも必ず成長していけることを、清真学園野球部での3年間でたくさん経験してほしいと思います。

小林浩太郎（37期） 2017年卒業

千葉大学 工学部 共生応用化学科 在学中

私は中学から清真学園で6年間過ごし、様々なことを経験しました。その中でも硬式野球部での3年間は私にとってかけがえのない時間だったとつくづく感じます。

一般に高校野球は練習がきつく、監督に毎日のように怒られ、朝早くから夜遅くまで練習をしているというイメージを持っている方が多いかもしれません。勉強面に不安を抱く学生も多いと思います。

実際に私が高校生のおきも練習はきつかったし、毎日怒られてばかりで辞めたいと思うことも多々ありました。しかし、終わってみればあの3年間で私は多くのことを学び、大きく変わりました。仲間の大切さ、諦めないこと、努力すること、どんなに逆境でも人間やろうと思えばできてしまうことなど、具体例を出せばきりがなほど多くのことを学び、成長できたと思っています。毎日のように怒られていたのも、こういう野球選手および人間になってほしいという先生なりの思いがあったからこそ厳しく叱っていたのだと考えています。

そんな環境で3年間で過ごしたことは受験勉強にも大いに役立ちました。野球部で培った集中力、体力、精神力は必ず受験勉強にも生きてきます。これは私の経験から断言できます。おそらく高校野球をやっていなかったら大学受験は失敗していたと思うくら

いです。

最後に、私達は夏の大会では一回も勝つことはできませんでした。それでもあのマウンドからの景色、鳴り響く相手チームの応援、自校のスタンドからの声援は今でも鮮明に覚えているし一生忘れません。あの大勢の観客の前で野球をする機会はもう二度とないと思います。同級生、先輩、後輩、先生方、保護者の方々、OBの方々、そして地域の方々など、一回戦からたくさんの方々に応援に駆けつけてくれるのは高校野球だけです。そんな最高の3年間を清真学園野球部で過ごしたことを誇りに思います。

杉本貴海（37期） 2017年卒業

山形大学理学部在学中

清真学園野球部では続けることの楽しさと難しさが学べる場所であると思います。

自分はほとんど毎朝、一番早くに学校に来て朝練を開始していました。もちろん一人では出来ないことでした。文句を言わずに協力してくれた両親や朝早くから練習につきあってくれた先輩方や同級生あってのことであり、感謝でいっぱいです。しかし毎日続けるというのはなかなか大変で最初のうちは心が折れそうなきももありました。しかし続けていくうちに出来ることが増えていく楽しさも感じられさらに試合などで結果が出るとやめられないものになっていきました。

これは何も野球だけに限らず受験勉強にも通じると思います。野球部としておよそ二年半自分で決めたことをやり通せたというのはかなりの自信になります。さらに続ければ結果が大なり小なり出るという体験も出来ます。これらの経験が受験勉強に生かされないはずがありません。

以上のことだけに限らず、清真学園野球部は自分を律するうえでこの上ない環境です。

高校で野球をやろうか悩んでいてなんだか大変そうだから嫌だなとか、辛いことをしたくないからやめておこうかなと思っている人は騙されたと思って始めてみませんか？実際大変だし辛いこともいっぱいあるけど、仲間と感動を分かち合い、それを周りの人にも届けることができるというのは本当に素晴らしいことです。高校野球は肉体的にも精神的にも自分自身を周りの人より一回り二回り成長させてくれます。この経験は将来絶対に自分のためになると断言できます。それほどまでに貴重な時間です。絶対に後悔させません。一人でも多くの後輩が野球部の門をたたくことを願っています

最近の新聞記事より

ストレッチなしアップなし 練習時間「県内最短」の秘密

2019年7月9日 07時00分 朝日新聞



ノックを受ける部員たち。移動は常に全力疾走だ=2019年6月14日午後5時18分、茨城県鹿嶋市宮中、佐々木凌撮影

鹿島神宮の森(茨城県鹿嶋市)に面した清真学園の野球場に午後4時前、制服姿の十数人が駆け込んできた。数分で着替え、1人はバッターボックスに。ほかの部員は守備につき、マシンを使った打撃練習が始まった。

15球程度打った打者は、自分の守備位置に猛ダッシュ。すれ違うように、守備についていた選手が全力疾走で打席に入った。部員11人全員が打席に立ち、30分ほどで終了。全員でネットを片付け、キャッチボールを3分間。全員が守備について5秒間隔でノックし、約20分間で終えた。

その後、個人練習の時間が約1時間あり、午後6時半に練習が終わった。移動はすべて全力疾走。「練習時間が短いから走り込みの代わりなんです」と久保匡平主将(3年)は言う。練習の前後にストレッチやランニングはしない。

部員が帰った後。グラウンドではトンボを取り付けた車が走り、グラウンド整備を始めた。運転するのは辻岡敦監督(47)だ。

「練習時間はおそらく県内で一番短いでしょう」進学校の同校は午後6時45分完全下校だ。月、金は2時間半、7時限まである水、木は1時間半しか練習できない。火曜は休養日。土日は練習試合がない限り、3時間以内に抑える。1995年から同部を指導する監督自身も元高校球児だ。甲子園に出場したこともある栃木県の黒磯高で、猛練習は深夜に及んだ。帰宅が午後11時近くになり、警察に補導されそうになることもよくあった。赴任当時、午後8時までノックをしていたら、翌朝校長に呼ばれ「うちはそういう学校じゃありません」と注意された。「こんなんじゃ勝てるのかと思った。発想を180度変えなきゃいけなかった」と振り返る。

技術練習の時間を増やすため、準備運動の時間を削った。体育教諭の辻岡監督には苦渋の決断だったが、徐々に短くし、半年ほどかけてゼロに。20分間のキャッチボ-

ルも少しずつ縮め、今は3分。練習中にプレーを止めてしていたアドバイスも数年後にはやめ、全体練習が終わってからまとめてやるようにした。

別の中学で野球をし、高校から同部に入った鈴木尊仁君(2年)は「アップをやるなんてあり得ないと思った」と振り返る。でも今は「教室から走ってきたり、ノックを待つ間に足首を回したり。意識すればけがは防げる」。昨秋の新チーム発足以来、けが人は1人も出ていない

「もっと練習したい、物足りないと思うこともある。でもそれを言い訳にしたくない」と話すのは、エースの生井沢慎之助君(3年)。打撃の順番を待つ時間に投球練習をしたり、帰宅後の勉強の休憩時間に筋トレをしたりを繰り返し、球速が10キロ近く伸びた。短い練習では投げ込みに制約があるが「試合の大事な場面で狙ったところに投げられる集中力がついた。練習の短さはハンデじゃない」と言い切る。

辻岡監督は「野球はあらゆる準備が必要なスポーツ。時間があればこれも教えられるのに……と申し訳なく思うこともある」と心情を吐露する。一方で、同部の練習スタイルが試合に生きた場面もあった。

2011年の茨城大会。五回までに8点差をつけられたが、選手らは前向きだった。五回に4点、六回に2点を返し、八回にも集中打で一挙4得点。10―9で勝った。「短い時間で複数の練習をしているから、負けていても切り替えが早いんでしょう」と話す。

久保主将も「時間を効率的に使うため、常に次の動きを考えることが、ここぞという場面での集中力に生きている。練習量では勝てなくとも、質の高さは他校に負けない」と胸を張る。(佐々木凌)

清真学園・白鳥が今までになかった選手宣誓／茨城

[2018年7月7日13時0分] 日刊スポーツ

<高校野球茨城大会：開会式>◇7日◇ノーブルホームスタジアム水戸

第100回全国高校野球選手権茨城大会が開幕し、開会式が行われた。記念すべき第100回大会での選手宣誓の大役を務めた清真学園の白鳥将汰主将(3年)は、これまでにない新しい選手宣誓を作り上げた。

まっすぐにマイクの前に立ち、「大好きな野球、大好きな仲間、大好きな家族、そしてこれまで支えてくれた多くの方々に感謝の思いを伝えます!」。そして一呼吸置いてから、「ありがとうございます!」と堂々とした力強い言葉とともに、約10秒

間深く頭を下げた。観客からは「おおっ」と驚いたような歓声と、割れんばかりの大きな拍手が送られた。最後は「今日からの19日間、熱い、熱い思いを白球に乗せて、夢かなうまで挑戦という思いを胸に、第100回大会という節目の大会で、最高の夏を作り上げることを誓います」と宣誓を締めくくった。

宣誓を終えた白鳥主将は「率直にほっとしています」と表情を緩ませた。「宣誓を考えたときに、感謝の思いが強かった。第100回大会ですし、ないものやってみたくって頭を下げました。拍手が鳴りやむまではお辞儀して思いを伝えようと思っていました」と経緯を明かした。感謝を伝えたいのは「みんなに対してです。あとは、野球ができることに対する感謝です」と話す。「拍手も上がっていたので、感謝の思いも伝わったかな」と充実感もにじませた。

清真学園は12日、古河一と那珂の勝者との2回戦から登場する。

清真学園・白鳥「ありがとう」感謝で涙の夏 ／茨城

[2018年7月17日0時37分] 日刊スポーツ

<高校野球茨城大会：水戸商17-3清真学園>◇16日◇3回戦◇ノーブルホーム
スタジアム水戸

清真学園ナインは、最後まであきらめなかった。水戸商の22安打の猛攻にも、ゲームセットまで15人の登録選手全員が声を出してもり立てた。白鳥将汰主将（3年）は「点を取られても雰囲気崩さないで、自分たちらしく思い切りやることができました。結果はついてこなかったですけど…」と涙を拭いながら言った。

「ありがとうございます」。この言葉で始まった、清真学園ナインの夏だった。7月7日、茨城大会の開会式。白鳥が選手宣誓の大役を務めた。第100回大会という節目での選手宣誓に、「今までにないものをやりたい」。そんな思いを込めて、宣誓のなかで「ありがとうございます！」と力強く言うと、約10秒間深々と頭を下げた。前代未聞の選手宣誓に、スタンドに集まった観客からは「おおおっ」と驚いた声上がり、やがて球場が温かい拍手に包まれた。「野球を通じて、感謝の心を学んだ。だからこそ、当たり前のように野球ができること、チームメイト、家族、監督さん、コーチ、支えてくれる全ての人への思いを込めました」と白鳥は言う。

人を助けたいとの思いが、17歳の白鳥の根底にある。昨年5月、曾祖母カツさんを亡くした。初ひ孫だったこともあり幼い頃から面倒を見てもらっていて、高校野球も応援してくれていたという。その矢先のこと、練習等で時間が合わず、カツさんの最期に立ち会うことはできなかった。「ひいおばあちゃんのかわりに、周りの人を助けたい」。高校卒業後は、福祉の道に進む。「老人ホームや特別支援学校で人の助けになることをやりたい。やりたいこと、自分に何があるかを考えたときに、小さい子どもやお年寄りを助けられる人になりたいと思いました」。

水戸商に敗れ、清真学園の夏が終わった。互いに支え合ったチームメイトに対しても、白鳥は改めて感謝を口にする。昨秋は9人しか部員がおらず、誰ひとり欠けられない状況だった。「ずっとチームをまとめられない主将だったんですけど、最後までついてきてくれたチームメイトに感謝しかないです」。辻岡敦監督（46）も目を潤ませながら「いい主将に支えられてここまで来た。ベスト32の中で最少人数で、よく頑張ったと思います。選手たちに『ありがとうございます』しかないです」と白鳥はじめナインの奮闘をたたえた。

野球で感謝の心を培った白鳥は「ありがとう」の心を胸に、強く周りを支えてくれるだろう。【戸田月菜】